アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』研究[1]

―― コルプスにおける位置づけをめぐって ――

秋　山　　学

I

アレクサンドリアのクレメンス（A.D.150-215）は，主要三著作（『プロトレプティコス』『パイダゴーゴス』『ストロマテイス』）を通じて，「覚知者」（gnôstikos）の歩むべき道程を段階的に記している。その内実は，クレメンス自身が『ストロマテイス』第七巻で「異邦の者から信への転回は救いの第一の変容であり，信から覚知への転回は第二の変容である」（Str. Ⅶ.10.57.4）と述べていることから理解できる。すなわちここで「異邦の者から信への転回」の次第と勧告を記した著作が『プロトレプティコス』であるのに対して，「信から覚知への転回」の次第を記したものが『ストロマテイス』であると考えられる。すると上記二作の中間に位置する『パイダゴーゴス』の位置づけはいかなるものになるのだろうか。

通常『パイダゴーゴス』は，洗礼の秘跡を受けた者に対して，更なる霊的成長を遂げるための勧告を述べる目的で著された作品であると解されている。すると「異邦の者から信の人へ，信の人から覚知者へ」という歩みにあっては，信の人となった者に対し，次のステップたる「覚知者」に歩みを進めるまでの間，真なる信を育むべく企図された著作であると理解されるだろう。

さて，先に筆者は，クレメンスが『ストロマテイス』において基調としている「覚知者」（gnôstikos）の地平が，通例「認識」と訳される epignôsis に多くを負っていること，そしてその epignôsis とは，秘跡と恩寵を通しての復活のキリストへの与かりを内実とすること，を明らかにした[2]。本稿では，上記のように「真なる信」を育むことを意図して記されたと考えられる『パイダゴーゴス』の主題をより明確にすることを試みたい。まず『パイダゴーゴス』各巻の内容から見てゆくことにしよう[3]。

『パイダゴーゴス』（「教育者」の意）の第一巻は，本著作全三巻の基盤をなす巻であり，その内容が後に続く第二巻，第三巻を体系的に総括しているとい

うことが指摘される。第一巻は全部で13章より構成されており，章見出しのみを列挙すると次のようになる。

Ⅰ．教育者はいかなる福音を伝えるか。
Ⅱ．教育者はわれわれの過ちを通して導くこと。
Ⅲ．教育者は人間愛に満ちていること。
Ⅳ．ロゴスは男女に等しく教育者であること。
Ⅴ．真理に与かるものはすべて神における子供であること。
Ⅵ．「子供」や「幼児」という呼び名が，初等教育課程のあり方を表していると考える人々を反駁する。
Ⅶ．教育者とは何者であるか，そして彼の教育（paidagôgia）とは何か。
Ⅷ．義が善であるとは限らないと考える人々に対して。
Ⅸ．善行をなすことと懲らしめを与えることとは同一の力に属し，そのうちに，御言葉の教育の何たるかが示されること。
Ⅹ．同一の神が同一のロゴスを通し，諭して罪を遠ざけ，人間性に勧告して救うこと。
Ⅺ．御言葉は律法と預言者たちを通して教育すること。
Ⅻ．教育者は父のあり方にも比すべく，厳しさと優しさを用いること。
XIII．正しき生き方は正しきロゴスに基づき，逆に過ちはロゴスに反して生ずること。

もっとも，各章の長さはまちまちであり，第五章，第六章が長く，特に第六章はこの一章だけで全体の四分の一強を占めるものである。後ほど，全三巻の基軸をなすこの第一巻から，引用を辿りながらより詳しくその内容を検討する。そしてさらに，特に第六章の前半部に関して，クレメンスの記述を逐語的に辿ることでその神学を追ってみたい。

この第一巻を「(教育）神学」論の巻とすれば，続く第二巻は「(教育）自然学」とでも称すべき内容の叙述である。その内容は下記のようである。

Ⅰ．食物に関してはいかにあるべきか。
Ⅱ．飲み物に関してはいかに振る舞うべきか。
Ⅲ．調度の華美に熱を上げるべきではないこと。
Ⅳ．饗宴にはいかに与かるべきか。

Ⅴ．笑いについて。
Ⅵ．猥雑な言説について。
Ⅶ．ともにつつましく生きようとする人が守るべきことどもについて。
Ⅷ．香油や花冠を用いるべきかどうか。
Ⅸ．眠りはいかにとるべきか。
Ⅹ．子孫を残すことに関して守るべきこと。
Ⅺ．履物について。
Ⅻ．石と金の飾りに囚われてはならないこと。

第一巻から第二巻への移行が「神学」から「自然学」への展開であるとすれば，続く第三巻の内容は「(教育) 倫理学・美学」とも言うべきもので，その内容は次のようになっている。

Ⅰ．真なる美について。
Ⅱ．化粧をすべきではないことについて。
Ⅲ．化粧をする男どもに対して。
Ⅳ．誰のために時間を割くべきか。
Ⅴ．水浴はいかになすべきか。
Ⅵ．キリスト教徒のみが富めることに関して。
Ⅶ．キリスト教徒にとって慎ましさは善き伴侶であること。
Ⅷ．像と範例とは正しき教えの最大の部分であること。
Ⅸ．水浴をすることの意義について。
Ⅹ．ロゴスに従って生きる者にとって，肉体の鍛練は勧められるべきこと。
Ⅺ．最良の生活に関する概説。
Ⅻ．同じく最良の生活に関する概説；聖書において，キリスト教徒の生活を特徴づけていることどもについて。

第二巻・第三巻は，上記のように日常生活の多岐にわたる問題に関する提言に満ちている。したがって単に神学・哲学分野のみならず，紀元後二～三世紀における地中海世界の生活様式等を知る上でも，この『パイダゴーゴス』が貴重な資料となっていることはしばしば指摘されるところである。もっとも神学的観点に限ってみても，三巻の内容は順に「教義学」「自然学」「倫理学」といった形でまとめうるため，「統一性を欠いた著作」だと一面的に評価すること

は正しくないと思われる。

Ⅱ

冒頭に述べた既出の拙論では，『ストロマテイス』でのクレメンスによる「epignôsis 理解」の根底には，新約聖書『ルカ福音書』末尾「エマオへの道」における，復活後のイエスを弟子たちが認識する場面が存在するということを結論部近くで述べた。クレメンスは『ストロマテイス』第一巻で次のように述べている。「救い主はまずパンを取り，言葉でもって感謝した。しかる後パンを割いて献げた。これはわれわれがロゴスに沿って（logikôs）食し，聖書を認識して（epignôn），従順（hypakoê）のうちに生活することができるためである」（Str. I. 10. 46. 1）。この記述は，動詞 epigignôskein が用いられていることも含めて『ルカ福音書』を背景にしているということが理解されよう。

『ルカ福音書』末尾近く（24章30/31節）の「イエスがパンを裂くと，二人の両眼が開け，彼らはイエスを認識した（epegnôsan）。すると（kai）イエスは二人から見えなくなった」というテキストにおいては，通常どの近代語訳も，普通順接接続詞である kai を敢えて逆接的に訳し「しかしイエスは見えなくなった」と訳している。けれどもおそらく福音記者の意図は，復活のイエスが聖餐のパンに全的に内在するということばかりでなく，人間の「認識」活動そのものに託身し，それを支えるのが復活のイエスである，ということを主張するものだと考えたい（なお「失踪」が「認識」の後に続くのは，復活者の愛によるものと理解できよう）。ここからの帰結として，上述のクレメンスの epignôsis 論も，聖餐を通して復活のイエスに参与する行為をその内実とする，と考えられるわけである。

さて，『ストロマテイス』においてクレメンスは「旧約」から「新約」への展開をめぐり，その二項関係を拡充させてギリシア文化圏に応用し，ギリシア人にあって「旧約」的な位置づけを得るものとして「愛智」（哲学；philosophia）を立てている。彼によれば，ギリシア哲学が彼らに与えられていたのは，彼らをキリストに向けて予め準備するためであり，それはヘブライ人に旧約として律法が与えられていたのに比せられるべき賜物であった。「愛智はおそらく，主がギリシア人をも招く以前は，第一義的なものとしてギリシア人に与えられていた。というのも，律法がヘブライ人をキリストに向けて導いたと同様に，愛智はギリシアを教育したからである。つまり，愛智はキリストによって完成

されるべき者を，前もって導き，前もって準備したのだ」(Str. Ⅰ.5.28.1-3)。「福音の告知が今まさに時宜を得てわれわれに届いているのと同じように，時宜に適った形で，ヘブライ人には律法と預言者が与えられ，ギリシア人には愛智が与えられた。愛智は彼らの耳を，福音の告知に適うように慣らしたのである」(Str. Ⅵ.6.44.1)。ここでは，ギリシア民族における哲学を，ユダヤ民族にとっての旧約の位置づけと同等なものと見なす点にクレメンスの独自性がある。もっとも，このようなクレメンスの見解も，言うまでもなく彼の「認識」epignôsis から得られたものなのである。

上述のクレメンスの論は，現代世界の流行語の一つでもある「異文化交流」に新しい光を投じうるものをも有している。哲学者リーゼンフーバー氏もこの点に着目し，次のように述べている[1]。「それぞれの民族は，多様なしかし互いに似通った仕方でキリストにおける啓示を受け入れるように導かれていったが，元来一なるキリストの教えは，それを受容する民族の精神世界に応じて，多種多様な文化的形態を採って発展することになる。そのためキリストの教えは，ヘレニズム的環境に置き入れたうえで，その表現様式をギリシアの生活風土に適ったものにする必要があった。もとより信仰においては内面的な態度こそが重要なのであり，セム族の思考形態や生活様式に限定されるわけではない」。

このような視点は，ひとまず典礼神学に具体化させることができる。典礼とは，諸民族が歴史的に様々な文化を織りなしてきた中で，それをキリストの受難・死・復活の記念の式のうちに総合的に体系化し，さらに伝えてゆこうとする際に現れ出る「様式」「かたち」である。多様な文化伝承，特に東方世界の文化的伝統が，ひいては東方典礼の多様かつ豊かな実りを生み出してきたことは，20世紀における典礼刷新と典礼神学の急速な進展が証明している。その際に上記のような教父クレメンスの基調が，様々な側面で影響を与えていることは否定しえない。

ところで，先にリーゼンフーバー氏が指摘していたように「信においては，セム族の思考形態や生活様式に限定されるわけではない」ことに注意したい。典礼学的には，たとえば現在では当然のことのように受け入れられている「聖書朗読」も，実はユダヤ民族が「律法」（トーラー）をはじめとする聖典を朗読していたことに根ざす伝統であることが判明している。また「最後の晩餐」もユダヤ教の祝福（ベラカ）と過越（パスカ）の儀礼に根ざすものである。したがって，ヘブル的伝承は「旧約・新約」よりなる「聖書」という構造と，そ

の朗読を含めたキリスト教典礼の基本的構造を規定していることになる。ではこのような「キリスト教典礼」の中から，そのキリスト教性における核心部分を抽出しようとした場合，何が得られるであろうか。この問いを掲げつつ，本論に入りたい。

Ⅲ

では『パイダゴーゴス』の第一巻から，重要箇所を拙訳によって辿りながらその内容を見てゆくことにしよう。

『パイダゴーゴス』第一巻第一章は「教育者はいかなる福音を伝えるか」と題されている。以下は冒頭の箇所である。「子たちよ，真理の礎は既に，われわれ自身によって固められている。それは，偉大なる神の聖なる神殿の基としての，砕かれることのない覚知（gnôsis）の礎であり，麗しき訓戒，ロゴスに適う従順を通じての永遠の生命（zôê aidios）への欲求であって，知の場に据えられている」(Paed. Ⅰ.1.1.1)。

ここには既に「神殿」(nâos)，「覚知」(gnôsis)，「ロゴス」，そして「永遠の生命」などの基本的語彙が見られる。これに続き「ロゴスの持つ三つの働き」という内容に関して述べられる。「さてロゴスは，次の三つの事柄をめぐって人間に関わる。それは倫理，行為，情念である。まず勧告者として，ロゴスは人の倫理を司る。つまり敬神の念（theosebeia）の導き手として，さながら龍骨のごとく信の建設のために措定される。その上に立ってわれわれは大いに喜び，救いを目に古の思いなしを破棄して若返り，〈神はイスラエルに対し，心の直き人に対して何と善き方であることか〉（詩72.1）と唱う預言に声を合わせる。2）次にロゴスはあらゆる行為に対し，提言者としてこれを監督する。さらに情念に対しては，慰め主としてこれを癒す。これらすべてにおいて，そこに関わるのは一にして同じロゴスであり，このロゴスが，生まれついた世の習性から人を引き離し，神への信の類まれなる救いに向け，教育者として関わる（paidagôgôn）のである。3）実に，このロゴスは天上的（ouranios）な導き手である」(Paed. Ⅰ.1.1.2-3) と語られる。引用末尾に見られた「天上的」という表現に注目しておきたい。

続いて第三章は「教育者は人間愛に満ちていること」と題される。「教育者」とは言うまでもなく「ロゴス」すなわち神の「御言葉」たる救い主・キリストのことである。「主は人間としてまた神として，すべてにおいてわれわれを益

し，すべてにおいてわれわれを助ける。神として罪を赦し，人間として，二度と罪を犯さないように鍛練する（parapaidagôgôn）。実に相応しくも，人間は神の友である。なぜなら人間は神の被造物であるから。他の被造物は，単に神が命じて創造しただけであったが，人間に関しては，神自身が手づから創造に携わり，自らに固有のものをそのうちに吹き込んだ（創2.7;1.26）。2）したがってこの被造物は，それ自体，神に選ばれたものとして創造されたにせよ，あるいは他のもののために選ばれて形作られたにせよ，神により神に向けて創られたものなのである。3）もし人間がそれ自体選ばれたものであれば，善きものであり，善である神を愛するはずである。人間のうちには愛情（philtron）が内在し，これは神の息吹（emphysêma）と呼ばれているものである。だが人間が他のもののために選ばれて創られたとすれば，神が人を創ったことには，次のこと以外の理由はない。それはすなわち，人間がいなければ神は善き創造者たることができないし，神をめぐる知にも到達されえないということである。というのも人間が創られた目的は，もし人間が創られていなかったならば，神が他の方法でなし遂げることはできなかったはずだからである。そして，意志という隠された形で有していた力を，神は創造という外的な能力をもって実現させた。その際，神は人間から，人間を創造する際に用いた像を受け取り，有していたものを目にし，望んでいたことを為し遂げたのである」（Paed. Ⅰ.3.7.1-3）。ここでは旧約聖書『創世記』に基づく「像」（eikôn）の神学，そして人間に内在する「愛情」（philtron）が「神の息吹」（emphysêma）とされ，神が「人間愛に満ちた存在」（philanthrôpos）とされることに注目したい。

続いて同第五章は「真理に与かるものはすべて神における子供であること」と題され，「人間を〈子供〉また〈嬰児〉であるとする聖書からの証言」がまず求められる。「さて「教育」（paidagôgia）とは子供たちを導くこと（agôgê）であり，これはその名前からして明らかである。残っているのは，聖書が比喩的に語っている「子供たち」について考察すること，しかる後この子供たちのために，教育者を立てるという課題である。「子供たち」とはわれわれのことである。聖書は，多くの箇所でわれわれを祝福し，様々な方法と多彩な名を用いながら，信の純正さについて言葉を換えつつ比喩的に述べている。2）実に，福音ではこのように記されている。〈主は岸辺に立って，弟子たちに向かって―彼らは漁をしているところだった―，こう声をかけた。「子たちよ，何か食べ物はないか」（ヨハネ21.4-5)〉。つまり既に弟子たちの身分にある者たちに

向かって〈子たちよ〉と呼びかけているのである。3）またやはり聖書にこう記されている。〈人々がイエスの許に，子供たちを連れてきた〉。それは祝福のために按手してもらうためであった。しかし弟子たちがそれを阻んだので，イエスはこう言った。〈子供たちを来させなさい。彼らがわたしの許に来るのを阻んではならない。天の国はこのような人々のものだからである〉（マタイ19.13-14）。4）また主自身が，この言葉の意味を明らかにすべくこう語っている。〈あなた方が回心し，この子供たちのようにならないかぎり，天の国に入ることは決してできないであろう〉（マタイ18.3）。ここでイエスが比喩的に語っているのは，再生（anagennêsis）ということよりもむしろ，子供たちに備わっている純正さを提示して，われわれもそれに倣うようにという指針である」（Paed. I.5.12.1-4）。

続く第六章は「〈子供〉や〈嬰児〉という呼び名が，初歩的な教えしか受けていないことを表していると考える者どもを反駁する」と題され，まず「洗礼の際に受ける完成」について論じられるが（Paed. I.6.25.1-32.4），前述のようにこの箇所をめぐっては後ほど詳述する。

続いて同第六章後半（I.6.39.1ff.）では，やや脱線ぎみに〈乳と血の本性的同一性〉について語られる。これは聖餐論とも関わるが，信の人の食物について述べた箇所である。「この食物〈乳〉は，新たに生まれ誕生する子供に相応しく適合するように，養育者でありかつ生まれた者・再生を遂げた者の父である神から，気遣いのもとに与えられた食物である。ちょうど天からマンナがいにしえのヘブル人たちに注がれたように，天上的な（epouranios）天使の食物なのである。3）もちろん今でも乳母たちは，最初に出て飲ませる母乳を，この食物と同じ名を用いて「マンナ」と呼んでいる。もっとも女性たちが妊娠して母となると，乳を含ませる。一方主であり処女の裔であるキリストは，女性の乳房を幸いなものとは呼ばず（ルカ11.27-28），その乳房を育み主とも見なさなかった。ただ慈しみと人間愛に満ちた父がロゴスを注ぎ出し，イエス自らが賢慮ある人々にとっての霊的な食物となったのである。

おお，神秘の不思議さよ！万物の父は一人，万物のロゴスは唯一，聖なる霊は普遍的に同一，そして唯一人の処女が母となった。この女性を「教会」と呼ぶことはわたしにとって好ましきことである。この唯一なる母は乳を注がない。なぜならただこの女性だけが夫人とならず，処女にして同時に母だからである。処女として汚れなく，母として愛に満ちている。そして自らの子供たちを招き続け，子供であるロゴスを聖なる乳として与え，慈しむ。2）したがって彼女

は乳を出さない。なぜなら，この麗しく適切な幼児であるキリストの体こそが乳だからである。それは，ロゴスでもって若さを育むものであり，その若さとは，主自らが肉の苦悩のうちに宿し，主自らが尊い血でもって包んだものである。3）おお聖なる陣痛よ，聖なる産着よ。ロゴスこそ，嬰児にとってのすべて，すなわち父であり母であり，教育者であり乳母なのである。主は言われる。「わが肉を食し，わが血を飲め」（ヨハネ6.53）。主はわれわれに，これらを相応しい食物として授け，肉として差し出し，血として注ぎ出す。子供たちにとって，成長のために欠けたものは何一つない。

おお，予想を覆す神秘よ！われわれには，古えの肉の腐敗をあたかも昔の食物であるかのように脱ぎ捨てる一方，キリストによる新たな別の生き方に与かり，もし可能であれば，キリストその人を取り込んで蓄え，救い主として抱擁するようにと命じられているのである。それはわれわれの肉の情念を骨抜きにするためである。2）しかしこのような取り方をせずに，おそらくはもっと一般的な理解を望むかも知れない。それならば次のような理解にも耳を傾けよう。〈肉〉という語でもって，聖霊が比喩的に表現されている。というのも肉は聖霊によって創られたからである。一方〈血〉という語でもってロゴスがほのめかされている。なぜならロゴスが，言わば豊かな血のようにわれわれの生に注ぎかけられたからである。この両者の混合（krasis）が主であり，幼い子供たちの食物（trophê）である。主とは霊とロゴスである。3）食物，すなわち主であるイエス，つまり神のロゴスは，肉となった霊であり，聖化された天上の肉である。…われわれを養う〈愛された〉（マルコ1.11etc.）ロゴスが，われわれのために自らの血を流し，人間性を救ったのである。4）それによりわれわれは信を抱き，父の「憂いを忘れさせる胸」（ホメロス『イリアス』，22.83），つまりロゴスの許へと身を寄せる。この方のみが，当然のことながら我々嬰児たちに愛の乳を授けてくださる。そしてこの胸に育まれた者だけが，真の意味で「至福なる」者なのである」（Paed. Ⅰ.6.41.2-43.4）。

引用がやや長くなったが「食物，すなわち主であるイエス，つまり神のロゴスは，肉となった霊であり，聖化された天上の肉である」という発言に認められるように，信の人が食物として摂るロゴスの天上性に注目したい。さらに，この食物を食す者が「天上のエルサレム」を観想する理についてこう続けられる。「食物を消化する過程は血で彩られているが，血は乳と化すため，ちょうどスペルマが人間の原型（paraskeuê）であり，ブドウの種がブドウの原型であるのと同様に，血は乳の原型である。かくして主の食物であるこの乳によっ

て，われわれは産み落とされるやすぐに育まれ，再生を遂げるや直ちに休らいの希望を抱き，〈そこには蜜と乳が降り注ぐ〉と記されている天上のエルサレム（出3.8）を告げ知らされて，質料的な食物を通じて聖なる食物の担保を受けるのである」(Paed. I.6.45.1-2)。

さらに続けてこう語られる。「主は自らの苦悩の完遂をも類比的に「杯」（マタイ20.22-23）と呼んでいる。それはこの杯を，完全に飲み干し尽くすことだけが必要だったからである。キリストにとっての食物とは，父の意志の完遂ということであった。一方嬰児であるわれわれにとっては，そのキリスト自身が食物であり，われわれは天のロゴスを飲み干すのである。ここから「求める」ことが「探る」(masteusai) と呼ばれる。それはロゴスを求める嬰児たちに対して，父の人間愛に満ちた乳房が乳を与えるからである。さらにロゴスは，自らが〈天から下ったパンである〉と同意している。2）〈なぜなら〉こう語られる。〈モーセはあなた方に天のパンを与えなかった。だがわたしの父は，あなた方に天からの真なるパンを与える。神のパンとは天から下って来て世に生命を与えるものだからである。そしてわたしが与えるパンとは，世の生命のためのわたしの肉である〉（ヨハネ6.32,33,51)。ここでは「パン」という語彙の神秘性に注意せねばならない。救い主は，それを自らの〈肉〉だと述べているが，これが〈復活した肉〉であるということについては，何と明らかであろうか。ちょうど小麦（pyros）が腐敗し蒔かれることによって復活するのと同様である。実にそれは，教会の喜びのために，火を通じて（dia pyros）焼かれたパンとして復興した肉なのである」(Paed. I.6.46.1-3)。

続く第七章は「教育者とは何者であるか，そして彼の教育（paidagôgia）とは何か」と題される。「さて既に，われわれはみな聖書に基づいて「子供」(paides) と呼ばれるばかりでなく，キリストの後に随き従った者として「嬰児」(nêpioi) とも比喩的に述べられている（allêgoroumenoi）ということ，そして万物の父のみが完全であるが，父のうちに子がおり，子のうちに父がいるということは示し終えた。計画によれば，われわれの教育者（paidagôgos）とは，一体誰であるのか，ということを次に述べねばならない。この方はイエスという名である。2）彼は自らを「牧者」と呼ぶことがあり，〈わたしは善き牧者である〉（ヨハネ10.11;14）と述べている。羊の群れを導く牧者からの隠喩（metaphora）により，子供たち（paidia）を導く者は，嬰児（nêpioi）らを世話する牧者という意味で「教育者」(paidagôgos) とされる。つまり嬰児たちは比喩により，単に「羊の群れ」とされているのである。3）主はこう語る。

〈すべては一つの群れとなり，一人の牧者のもとに集う〉（ヨハネ10.16）。かくして，われわれ子供たちを救いへと導くロゴスは「教育者」とされるに相応しい。実にこのロゴスは，自らについてホセアを通じ，はっきりとこう語っている。〈わたしはあなた方を教える者（paideutês）である〉（ホセア5.2）。教育とは敬神であり，神への勤め（therapeia）を学ぶことであり，真理の認識（epignôsis）に向けての教え（paideusis）であり，天に向かう真っ直ぐな導き（agôgê）なのである」（Paed. Ⅰ.7.53.1-3）。ここには『ストロマテイス』の主題に近いタームとして指摘した「認識」（epignôsis）と「教育」との関連性が述べられている。さらに続けて「観照」（epopteia）というクレメンスの神秘思想に関わる重要なテーマに言及される。「ところで「教育」（paidagôgia）とは，様々なものに対して付される呼び名である。まず，導かれ学ぶ者に関して「教育」と言われる。次に，導き教える者に関して「教育」と呼ばれる。そして第三に導き（agôgê）そのものが「教育」と呼ばれる。第四には教えられる事柄が「教育」と呼ばれる。たとえば律法がそうである。しかるに神に関する教育とは，神の観照（epopteia）に向けて真理を直接指し示すこと（kateuthysmos）であり，聖なる行為を永遠の持続性のうちに規範づけること（hypotypôsis）である」（Paed. Ⅰ.7.54.1）。

続いて第八章「義が善であるとは限らないと考える人々に対して」では「神の愛，正義，そして善性」について語られ，さらに第九章「善行をなすことと懲らしめを与えることとは同一の力に属し，そのうちに，御言葉の教育の何たるかが示されること」においては，教育の中で用いられる「咎め」の12の種類について順に論じられる。それは1.訓戒　nouthetêsis（76.1-）2.処罰　epitimêsis（77.1-）3.非難　mempsis（77.3-）4.懲戒　epiplêxis（78.1-）5.難詰　elenchos（78.2-）6.諫言　phrenôsis（79.1-）7.弾劾　episkopê（79.2-）8.面罵　loidoria（80.1）9.説示　enklêsis（80.2）10.勧告　mempsimoiria（80.3）11.冷笑　diasyrsis（81.1）12.叱責　katanemesêsis（81.2）である。さらに「救い主・牧者・教育者としてのロゴス」というテーマが再び取り上げられ，「聖なる山」としての教会が示される。「主よ，あなたの牧場である正義を満たして下さい。そうです，教育者よ，われわれをあなたの聖なる山，教会（ekklêsia）へと牧して下さい。高く挙げられ，雲を越え，天にも届く教会へと。主は語られる，〈わたしは彼らの牧者となり，彼らに近くあろう〉（エゼキエル34.23），彼らの肌を覆う外衣のように。主はわたしの肉を救うことを望み，不滅性の外衣をまとわせてわたしの肌に塗油をされたのだ（ke-

chriken)」(Paed. Ⅰ.9.84.3)。

続いて第十章では「同じ神が同一のロゴスを通し，諭して罪を遠ざけ，人間性を勧告により救うこと」，第十一章では「御言葉は律法と預言者たちを通して教育すること」が述べられる。その際に強調される点は，ロゴスにおける「人間愛」と「内在性」である（Paed. Ⅰ.11.96.1)。さらに「教育者は父のあり方にも比すべく，厳しさと優しさを用いること」と題された第十二章では，再び，信の人となって再生を遂げた者の「天上性」について語られる。「これまでに扱った事柄に伴うべき結論は，われわれの教育者であるイエス・キリストが，われわれに対して真なる生を提示し，キリストにおける人間を教育形成した，ということであろう。彼の性格は，厳格なること甚だしいというわけでも，その善性のゆえにあまりに放任主義的であるというわけでもない。彼は掟を定めるけれども，同時にわれわれがその掟を全うすることができるように，掟を定める方でもある。2）そしてわたしには，まさしくこの同じ方が，人間を塵から創造し，水によって再生させ，霊によって成長させ，言葉によって教育し，聖なる掟を通じて子たる身分また救いへと修正したように思われる。これは実に，大地から生まれた人間を，聖なる天上的な存在（hagion kai epouranion）へと段階的に創り変え，特に神のあの声を満たすためであった。〈人間を，われわれの像また似姿として創ろう〉(創世1.26)。3）そして実に，神が言われたこの言葉を満たすものとなったのは，キリストであった。それ以外の人間は，ただその像と見なされる。しかるにわれわれは，おお善き父の子ら，善き教育者の教え子らよ，父の意向を満たそうではないか。御言葉を聴き，われらの救い主による真に救いの生を，担い刻もうではないか。この世にあってすでに天上的な生き方を実践し，神化を遂げて，枯れることも萎むこともない歓喜と芳香の塗油に与かり，主の生き方を不滅性の明確な規範として抱き，神の足跡を辿ろうではないか」(Paed. Ⅰ.12.98.1-3)。

Ⅳ

以上，『パイダゴーゴス』の基盤となる第一巻を，第六章を別にしてやや詳しく引用を辿りながら見てきた。続いて第二巻，第三巻についても簡単に目を通しておくことにしよう。

まず「食物に関してはいかにあるべきか」と題された第二巻第一章冒頭では「生涯を通して「キリスト者」と呼ばれるためには，いかなる人間でなければ

ならないかを，章立てにして述べねばならない。そのため，われわれはわれわれ自身から，いかにして自らを整えるべきかということから始めねばならない」（Paed. Ⅱ.1.1.1）と語られる。この章は，「飲み物に関してはいかに振る舞うべきか」と題された続く第二章と合わせて，パンとブドウ酒に関わるクレメンスの秘跡論が展開される箇所である。そして次第に聖餐における「パン」に向けて，秘跡の根底にあるものが「愛」であることが強調される。「愛とは真に天上的なる食物であり，ロゴスに基づく食物である。〈(愛は)すべてを忍び，すべてに耐え，すべてを望む。愛は決して止むことがない〉（Ⅰコリント13.7-8)。〈神の国でパンを食す者は幸いである〉（ルカ14.15)」(Paed. Ⅱ.1.5.3)。「律法と御言葉のすべては，この愛に立脚している。もしあなたの神であり隣人でもある主を愛するなら，この天上的饗宴は天国にあって「宴」（euôchia）と呼ばれる。一方地上的饗宴は「宴会」（deipnon）と呼ばれる。それは聖書から示される通りである。つまり宴会は愛を通してなされるにしても，宴会が「愛」そのものとはならない。愛とは，共同体的（koinônikos）であり，かつ進んで分かち与える（eumetadotos）善き思い（eunoia）の徴だからである。2）使徒はこう言っている。「われわれの善さが，誹謗の対象とならないようにせよ。神の国は食べ物や飲み物ではなく」—つまり，日々の糧が最良のものと見なされるために—，「聖霊における正義と平和，そして喜びなのだから」(ローマ14.16-17)。この最良のものを食す者は，諸事物のなかで最高のもの，すなわち神の王国を獲得し，この地上にあって愛の聖なる集い（synêlysis），つまり天上的教会を実現するであろう。愛とは浄らかにして神に相応しい財産であり，分かち合い（metadosis）は愛の業である」(Paed. Ⅱ.1.6.1-7.1)。

続く第二章の「水とブドウ酒に関する象徴」が語られる部分では，次のように豊かな秘跡解釈が展開される。「聖なる葡萄は，預言の房を発芽させた（イザヤ5.1)。これは放浪から休らいへと導かれた者たちのためのしるし（＝十字架)，偉大なる葡萄の房，われわれのために絞られた御言葉，その血が救いのために流されるべく，御言葉が，水と混ぜ合わされることを望んだ葡萄の房の血（ヨハネ2.7-9）である。主の血は二つの様相をもつ。一つは彼の肉的な血であり，それによってわれわれは滅びから贖われている（1ペトロ18-19)。もう一つは霊的な血であり，これによってわれわれはキリスト者となっている（kechrismetha)。そして〈イエスの血を飲む〉とは，主の不滅性に与かることに他ならない。霊は御言葉の力であり，それは血が肉の力であるのと同じである。同様にぶどう酒は水と混ぜ合わせられ，人間には霊が混ぜられる。前者

すなわち混酒は信を養い，後者すなわち霊は不滅性へと導く。かくしてこの両者すなわち飲物と御言葉の混合（krasis）が〈恩寵の祭典〉（eucharistia）と呼ばれる。これは麗しく讃えらるべき恩寵（charis）である。この祭義に信をもって与かる人々は，肉的にも霊的にも聖化される。その人は神的な混酒（krâma）であり，そこには父の意向が，霊と御言葉へと人間を招き入れるべく神秘的に働いている」（Paed. Ⅱ.2.9.3-20.1）。「というのも実に，霊は，霊によって育まれる霊魂のうちに住むからである。一方肉はロゴスによって治められる。この肉とは〈御言葉が肉となった〉（ヨハネ1.14）と言われる場合の肉である」（Paed. Ⅱ.2.19.3-20.1）。

このほか第二巻で注目すべきは，最終章第十二章「石と金の飾りに囚われてはならないこと」で，『黙示録』に基づき天上のエルサレムの装飾について言及される点である。「われわれは，天上のエルサレムが聖なる石の城壁で囲まれていると教わっている。そして宝石になぞらえられた天上の都市の十二の門は，使徒によって告げられた恩寵の顕現を比喩的に表現したものだと理解している（黙示21.18-21）。なぜなら高価な宝石の上には彩色が，その色彩もきらびやかに施されているが，それ以外の材質は地上的なまま残されているからである。2）これらでもって，相応しくも象徴的に，霊的に建設された聖者たちの都市に城壁が施されているのである。さらには，比類のない宝石の輝きは，染みのない霊の輝きとその内実の聖性だと考えられている」（Paed. Ⅱ.12.119.1-2）。

続いて簡単に第三巻を見ておこう。章立ての項目は前掲したとおりであるが，まず第一章は「真なる美について」と題され，第三巻が実践的に美学的な問題にも関わることを示唆する。「察するに，あらゆる教えのなかで最大のものは，自らを知るということであろう。というのも，もし自らを知るならばその人は神を知るであろうし，神を知った人は神に似た者となって，金で着飾ったり長衣を身につけたりせずに善をおこない，どんなわずかなものにも事欠くことがなくなるであろうから。しかるに神は唯一自足する方であり，われわれが，まず思惟の飾りのゆえに浄らかであり，次に身体の飾りをも併せ，染みのない衣つまり節制をまとうのを見ることを，最も喜びとする方なのである」（Paed. Ⅲ.1.1.1）。

続く第三巻の各章では，やはり第一巻で取り上げられた教義的な諸問題を実践するに際していかなる点に配慮すべきかが語られてゆく。「最良の生活に関する概説；聖書において，キリスト教徒の生活を特徴づけていることどもにつ

いて」と題された第十二章では，モーセによる十戒に解説が及ぶ。「われわれには，モーセによる「十戒」があり，これは単一の文字（I）をもって象徴的に表されていて，罪からの救いの名をこう規定している。「姦淫してはならない，偶像に仕えてはならない」，男色をしてはならない，「盗んではならない，偽証をしてはならない，あなたの父と母とを敬え」（出20.13-16，申5.16-20，『ディダケ』2.1），そしてこれらに続く事どもである。われわれはこれらのこと，および聖書を読むなかで命じられるこの他のことを守るべきである。2）イザヤを通しても，主はこう命じている。「自らを洗え。清くなれ。わが目の前で，あなた方の霊魂から悪を取り除け。善を行うことを学び，裁きを追い求め，災悪を被った者を救い，孤児のために裁きを行い，やもめのために弁護せよ。さあ，論じ合おうではないか，と主は言われる」（イザヤ1.16-18）」（Paed. Ⅲ．12.89.1-2）。

そして第三巻末尾にはキリスト讃歌が付されており，これはクレメンスの真作と見なされている。

V

では続いて，第一巻第六章「〈子供〉や〈嬰児〉という呼び名が，初歩的な教えしか受けていないことを表していると考える者どもを反駁する」の内容検討に移ろう。後半部を先に紹介したが，前半部では「洗礼の際に受ける完成」というテーマが扱われている（Paed. I．6.25.1-32.4）。「われわれは，論争好きな者どもに対し，果敢にそれを受けて立つ準備が十分にできている。なぜなら，われわれが「子供」あるいは「嬰児」と呼ばれるにしても，覚知に到ったと尊大に誇示する者どもが侮蔑的に言っているような意味で，われわれの学びが子どもじみて軽蔑に値するということは決してないからである。実にわれわれは，再生を遂げて（anagennêthentes）直ちに，そのために尽力してきた完全性（to teleion）を獲得したからである。われわれは照らしを受けた（ephôtisthêmen）のである。これこそ「神を認識する（epignônai）」ということである。完全性を知悉した者が不完全であるわけはない。もっともわたしが「神を知り抜いた」と認めているとは受け取らないで欲しい。御言葉に対しては，こう述べるのが相応しいと思われるからである。しかもその方は「自由である」（ヨハネ8.35-6;17.3）。2）実に，主が洗礼を受けられたとき，直ちに天から愛の神が証言する声が響きわたった。〈あなたはわたしの愛する子，わたしは

今日あなたを生んだ〉(マタイ3.17)。知恵者を自称する者たちに問いたい。「今日再生を遂げたキリストはすでに完全であるか，それとも—馬鹿げた話だが—，不完全であるか？」と。もし不完全であれば，主はさらに何か学ばねばならないはずである。しかし主が，さらに何か一つでも学ぶ必要があるはずはない。彼は神なのだから。御言葉よりも誰か偉大な者，唯一の師にとっての師がありえようか。3）したがってたとえ反対論者であろうとも，完全なる父から完全なるあり方で生まれたロゴスが，経倫／救い（oikonomia）の先取りとして完全な形で再生を遂げたということを認めざるを得ないのではなかろうか。だがもし完全なのであれば，何ゆえに完全なる方が洗礼を受けたのであろうか。聖書に曰く，人間にとっての約束を満たす必要があったからである（cf. マタイ3.15)。まったくその通りだと言いたい。ではイエスは，ヨハネから洗礼を受けると同時に完全なる者となったのであろうか。それは明らかである。ではイエスにとって，さらに学んだことはなかったのだろうか。なかったのである。ではただ浄め（loutron）のみによって完全なものとされ，霊の降臨によって聖化されたのであろうか。そのとおりである」(Paed. I. 6. 25. 1-3)。

上の引用中には，クレメンスが「キリストの洗礼」と「信者の洗礼」とを等置する考えを持っていることが注目される。これは短絡的に過ぎて，現代の神学者たちからは評価されにくい考えかも知れないが，たとえばアンティオキア学派に属すモプスエスティアのテオドロスなどは，今の世と来たるべき世とを厳しく区別し，現世の不完全性を強調するのに対して，思弁的傾向を持つアレクサンドリア学派の終末観の一環として興味深い。

クレメンスの記述は続き，同じトーンの神学観が綴られる。「これと同一の事柄がわれわれにも生ずる。主はわれわれにとっての規範（hypographê）となったのである。われわれは洗礼を受けることによって照らされ，照らされることによって子とされ，子とされることによって完全なものとされ，完全なものとされることによって不死なるものとされる。曰く〈わたしは言った。「あなたがたは神々であり，すべて至高なる方の子らである」〉（詩82.6)。2）この業については，様々な名で呼ばれている。すなわち「賜物」(charisma)，「照明」(phôtisma)，「完成」(teleion)，そして「浄め」(loutron) などである。「浄め」と言われるのは，それによってわれわれが罪を洗い浄めるからであり，「賜物」とされるのは，これによって罪に対する罰が取り除かれるからである。「照明」と言われるのは，これを通じてあの聖なる救いの光が観照される(epopteuetai)，すなわち神的なものを直視することができるからである。そして「完

成」とされるのは，これに欠けたるところがないからだと言える。3）というのも神を知った者にとって，さらに何が欠けていようか。未だに満たされていない賜物を「神のもの」だとするのは，甚だ愚かなことである。明らかに神は完全な方であるがゆえに，完全な形で賜物を下さる。神が命ずると同時に万物が成るのと同様，神が望んだだけで，賜物の賦与には恩寵の充満が伴う。時間的に来たるべきものは，意向の力によって先取りされる（prolambanetai）からである。さらに，悪から解放されることは救いの始まりである。

27. 1）かくして，まずもって生命の限界（horoi）を克服した者のみが既に完全な者であるが，われわれは既に死から切り離されて生きている。そして救いとは，キリストの後に従うことである。〈キリストのうちに成ったもの，それが生命である〉（ヨハネ1. 3f）。そしてこう語られている。〈よくよくあなた方に言っておく。わたしの言葉を聴き，私を遣わされた方を信じる者は，永遠の生命を持ち，裁かれることはなく，死から生命に移っている〉（ヨハネ5. 24）。したがって，ただ信じ，再生を遂げる（anagennêthênai）ということだけが，生命における完成（teleiôsis）なのである。神は力を失うということがない。ちょうど神の意向が業であり，それが「世」と名付けられているのと同じように，神の望み（boulêma）とは人間の救いであり，これが「招かれた者たちの集い＝教会」（ekklêsia）と呼ばれているのである。従って神は自ら招いた人々を知っており，神が招いた人々とは，神が救った人々である。神は招くと同時に救ったのであるから。使徒はこう語っている。〈あなた方は，直接神から教えを受けた人々なのです〉（Ⅰテサロニケ4. 9）. 3）したがってわれわれには，神によって教えられた事柄を不完全だと考えることは許されない。逆にこの学び（mathêma）とは永遠なる救い主の永遠なる救いである。この救い主に誉れが永遠にあるように。アーメン。そしてただ再生を果たした者のみが，まさしくその名が示しているように，照らしを受けるや直ちに闇から解き放たれ，その場で光を獲得したのである。

28. 1）ちょうど眠りを振り払った人々が，直ちに内面からの目覚めを果たすのと同様，あるいは，ちょうど眼のそこひを取り払おうと試みる者が，自分の有していない光を自らに対して外側からもたらすことはできず，むしろ視覚の妨げとなっているものを取り除くとき，瞳を自由な状態にしておくことができるのと同じように，洗礼を受けたわれわれも，霧のごとくに影を投げ掛ける罪を，神的な霊によって拭い去ることによって，自由にして妨げなく，輝ける霊の眼を有することになる。実にわれわれはこの霊のみによって神的なものを

観照する（epoptein）ことができるのである。これは天からわれわれに聖霊が注がれることによる。2）これこそ永遠の輝きの注入であり，この輝きによって永遠の光を眼にすることが可能となるのである。似たものは似たものにとって親しいがゆえに（プラトン『ゴルギアス』510B），聖なるものは，そこから聖性のあふれ出るものにとって親しい。これこそまさしく「光」（phôs）と呼ばれているものである。「あなた方はかつては闇であったが，今や主において光である」（エフェソ5.8）。古の人々によって，人が「光」と呼ばれたのはここに由来するものだと私は思う。3）だが彼らが，完全な賜物を受け取ったのではない，とも言われている。わたしもこれには賛同する。ただその人は光のうちにおり，闇が彼を虜にしているわけではない。光と闇との間には何も存在しないからである。完成（telos）は，信じる者たちの復活の際になし遂げられる。もっとも，予め告げられている約束（epangelia）を受ける以外には，与かりうるものは何もない。というのも，終結（peras）への到達と，到達を予握（prolêpsis）することとが，両方同時に成立するとは考えられないからである。永遠と時間は同一ではなく，発端（hormê）と完成は同じものではない。しかし双方とも一つのことに関わり，双方にとって一つのことが目されている。5）かくして言わば，信とは時間のうちに生まれる発端であり，約束への参与が永遠に保証されることこそ完成である。主自らが救いの等しさ（isotês）について極めて明確にこう啓示している。〈子を見て，子を信じる者がすべて永遠の生命を受けること，これこそわたしの父の意向であり，わたしはその人を終わりの日に復活させる〉（ヨハネ6.40）。

29. 1）したがってわれわれは，この世―それは「終わりの日」「終わりになる時までとって置かれる」（Ⅱペトロ3.7）という表現で暗示されている―で可能なかぎりのことにおいて，われわれが完全なものとなると信じている。というのも信とは学びの完全性（mathêseôs teleiotês）だからである。それゆえ「子を信じる者は永遠の生命を有する」（ヨハネ3.36）と語られる。2）もし信じたわれわれが生命を有しているのであれば，永遠の生命を獲得したということ以上に，更に何が残されているであろうか。それ自体が完全であって満たされた信心にとって，足りないものは何一つない。もし信に何かが欠けているとすれば，それは完全ではなく，何らかの点で躓くものであれば信でさえなく，この世からの旅立ちの後に，信じた者たちつまりこの世で等しく手付金を受けた者たちを待ち受けているものでもない。3）信じることによって，将来起こるであろうと既に予期している事柄を，われわれは復活の後に実現することと

して受け取っている。それは〈あなたが信じる通りになるように〉(マタイ9.29)と語られたことが実現するためである。信のあるところ，そこに約束があり，約束の完成（teleiôsis）とは休らい（anapausis）である。したがって覚知は照らしのうちにあるが，覚知の満限（peras）は休らいであり，それは終末的な望み（eschaton orekton）として抱かれる。4）つまりちょうど，無経験は経験によって解消し，前人未到は歩みによって切り開かれるように，照らしによって闇は滅却されるのが必然である。無知こそその闇であり，この無知によってわれわれは過ちに陥り，真理に関して明確な視覚を持たずにいる。覚知こそこの場合の照らしであり，これは無知を滅却し視力を内在させる（entitheis)。5）だがそれに留まらず，より悪しきものを切り捨てることは，より善きものを明るみに出すことである。なぜなら無知がまずい仕方で呪縛している事柄は，認識（epignôsis）によって見事に解決されるからである。しかるにこの呪縛は，人間の側からは信により，また神的なあり方としては恩寵（charis）によって，速やかに除去される。その際，唯一なる癒しの妙薬，すなわちロゴスによる洗礼によって，過ちは拭い去られるのである。

30. 1）かくしてわれわれは，すべての過ちを洗い浄め，その直後から悪とは無縁である。この照明の第一の賜物は，われわれがあり方(tropos)の点で，浄めを受ける以前と同じ存在ではない，ということである。覚知が照明とともに与えられ，理性（nous）を照らすということは，弟子となるや直ちに，学びの足りぬ身ではあっても耳にすることであり，学びが加わる以前の段階で起こる。それが何時なのかについて語ることはできまい。2）というのも教理教育（katêchêsis）は信へと巡り導く（periagei）が，信は洗礼とともに聖なる霊を通じて教え授けられる（paideuetai）からである。ただ信だけが，人間性に対する唯一の普遍的救いであり，かつ義しく人間愛に満ちた神の平等性（isotês）と通交性（koinônia）は，万人に対して同一のものである。ここから使徒は，およそ次のように語って明白な理解を示している。〈信が現れる以前には，われわれは律法の下で監視され，信が啓示されるまで閉じ込められていた。こうして律法はわれわれにとって，キリストへの教育者（paidagôgos）となった。われわれが信によって義化されるためである。しかるに信が現れたため，もはやわれわれはこの教育者の下にはいない〉（ガラテヤ3.23-25)。

31. 1）「われわれはもはや，あの律法の下にはいない」ということを今耳にしなかっただろうか。この律法とは恐れを伴うものであり，ロゴスの下にあって選択（proairesis）のための教育者なのである。続いて使徒は，あらゆる不

公平を脱した次のような見解を付け加えている。〈あなた方はみな，信によりキリスト・イエスのうちにあって神の子らなのだ。あなた方はキリストへと洗礼を受けたのだから，キリストを身にまとっている。ユダヤ人もギリシア人もなく，奴隷も自由人もなく，男も女もない。あなた方はみな，キリスト・イエスにおいて一つなのだ〉（ガラテヤ3.26-28）。2）つまり，同一のロゴスのうちにあってある者は覚知者（gnôstikos）だがある者は「魂者」（psychikoi）である，といったことはあり得ず，すべての者が等しく肉の欲情を棄て去り，主の許で霊的な存在（pneumatikoi）なのである。また別の箇所では次のように記している。〈われわれは皆，ユダヤ人であれギリシア人であれ，奴隷であれ自由人であれ，一つの霊において一つの体へと洗礼を受けた。だから皆が一つの杯に与かって飲むのである〉（Ⅰコリント12.13）」（Paed. Ⅰ.6.26.1-31.2）。

Ⅵ

以上，『パイダゴーゴス』の第一巻特に第六章を中心に，クレメンスにおける洗礼観，それを基に構築された教会観を見てきた。『パイダゴーゴス』には，旧約聖書第二正典『シラ書』からの引用が，他の教父たちに比して例外的に多い。『パイダゴーゴス』にあっては，「教育者」（paidagôgos）の語る言葉として，イエスの言葉の他にしばしば，このシラ書の著者の言葉も引かれる。これは同書がEkklêsiastikosの別名を持つことに合致している。そして彼の教会論は，『パイダゴーゴス』に続く『ストロマテイス』でも継続展開されている。たとえば『ストロマテイス』第四巻には次のような発言が認められる。「地上の教会は天の教会の像である。実際われわれは，神の意向が天におけるごとく地上にも実現されるようにと祈っている（マタイ6.10）」（Str. Ⅳ.8.66.1）。「わたしは，キリストの霊が翼を与え，わたしをわがエルサレムへとはばたかせてくれるように祈る。ストア派の人々は，天とは他でもなく都市であり，この世にあって地上にあるのは，もはや都市ではないと言っている。つまり「都市」と呼ばれてはいるが，そうではないと言うのである。都市とは厳粛なものであり，民とは町に相応しき組織であり法によって支配された多数の人間である。それはちょうど，ロゴスの許なる教会が，包囲されず借主もいない地上の都市のごとく，地上にあってあたかも天国にある神の意向そのものなのと同様である。3）詩人たちは，この都市の似像を作り，作品に残している。つまりヒュペルボレオイやアリマスペイオイの町々，それにエリュシオンの野は義人たち

の住む都市である。プラトンの描く都市も，範例として天に置かれているのを，われわれは知っている」(Str. Ⅳ. 26. 172. 2)。あるいはその他の著作の断片部にも次のような用例が見られる。「ダビデの子ソロモンは『列王記』と題される書物の中で，真の神殿の建立とは，天上的で霊的であるだけでなく，すでに，ダビデの子にして主が顕現するときに建てられるべき肉に関わる，ということを理解していた。主は顕現の際，言わば魂をもった（empsychon）像として，また信の一致のうちに教会（ekklêsia）を興すために，その礎を定めようと決意していたのである。ソロモンはこう問うている。〈神は人とともに地上に住まわれるだろうか〉（列王上8. 27LXX)。しかるに神はこの地上に，肉をまとって住まわれた。そしてイエスにあって，義人との和合・調和のうちに，人との共生が成立したのである。イエスは聖なる神殿を建て，かつ再興したのであるから」(Fr. 36, 218. 24-219. 1　Stählin)。この一節は，クレメンスによる『ユダヤ人に宛てて』と題される断片の一節であるが，『列王記』上において神殿建立の際にソロモンが発した言葉を，予型論的に解釈した注目すべきものと思われる。

Ⅶ

以上の考察から，『パイダゴーゴス』の目的は，復活のキリストに発する「天上的」共同体たる「教会」(ekklêsia）の一員となるための導入であることが明らかになった。第二，第三巻に見られる食物や衣服などに関するこまごまとした規定は，すべて「天上的」「共同体」たる教会を念頭においてなされている。クレメンスはさらに「愛」(agapê）を「天上的食物」と呼び，終末まで天上的共同体を育む糧として「愛」を位置づけている。

そしてクレメンスの描く天上的共同体の中心には，遍在する復活のキリストの霊があり，その霊に倣う秘跡こそ，洗礼という秘義である。クレメンスにとって，洗礼こそキリストの死に倣うものである。『ストロマテイス』は，復活のキリストに与かる聖餐により epignôsis を獲得することを主題としていたと言える。つまり「復活」と「聖餐」の論であった。これに対して『パイダゴーゴス』は，洗礼を受けて再生を遂げた人間が，再生を遂げて「子ら」となった者たちの共同体である教会 ekklêsia をいかに構成すべきかを記した書と言えよう。もっともクレメンスにあっては，洗礼による再生こそ「完成」のための約束であるとする傾向が強く，教会共同体における終末実現性を強調する傾き

が大きいと言える。その際にこの共同体の糧となるのは，やはり復活のキリストの肉であり，また「天上的食物」とされる愛である。

もとより，ヘブルに発したキリスト教が「聖書朗読」そして「パスカ」に基づく典礼様式の礎を据えたのに対し，クレメンスはギリシア・アレクサンドリア的な神学に立脚する道を選んだ。その過程において，おそらくストア派の構想に基づくであろう「論理・自然・倫理」学の天上的変容による神学体系を構築することが可能となったと言えるのではないだろうか。その実りが『パイダゴーゴス』全3巻であり，この共同体的学問構築は，後の『ストロマテイス』において，epignôsis の追究へと展開されてゆくのである。

注

1　本稿は，2003年12月6日に聖心女子大学にて行われた第107回教父研究会での口頭発表原稿を基にしている。柴田有委員長をはじめとする同会のメンバー諸氏に感謝申し上げたい。

2　2002年9月，長野県茅野市にて行われた第三回東方キリスト教学会での口頭発表「アレクサンドリアのクレメンスにおける覚知者（gnostikos）の本質」。同発表の内容は，東方キリスト教学会学会誌『エイコーン』第28号2/2, 34-51頁，新世社，2003年を参照。

3　クレメンスの原典テキストは，『パイダゴーゴス』に関しては Sources Chrétiennes の№70，108，158を，それ以外の著作に関しては GCS を用いた。

4　K.リーゼンフーバー『中世思想史』(『中世思想原典集成』別巻，平凡社2002年)，23頁。